

## デューイとヘーゲル

### ――一八八〇年代のデューイに関連して――

亀 尾 利 夫

#### 一、哲学の方法として考えられた「心理学」とヘーゲル主義

デューイにおけるヘーゲル主義は、八三年に印刷発表された『感の相対性と知識』(“Knowledge and the Relativity of Feeling,” *The Journal of Speculative Philosophy*, XⅢ) にはじめて明確な姿をみせる。この論文に先立つ『唯物論の形而上学的前提』とスピノザの汎神論』においては、ヘーゲル主義の論調はみられず、大学での師、トリー Henry A.P. Torrey, 1837―1902、がカント主義者であったためと思われるが、デューイは、いくつものカント的な概念をまじえながら、主としてスコットランドの常識的实在論の言語で、大変図式的、形式的に語っている。<sup>2)</sup>

「感の相対性」の意図は、心理学において確認されている「感の相対性」の理論と矛盾しない知識論がどのようなものでなければならぬかを明らかにすることである。その理論は、感覚主義でも、主観主義でも、不可知論でもなく、「思惟 Thought」の構成的な力を認め、この思惟がそれ自体究極的な存在 Being であり、したがって対象を規定する、とみなす理論」(J. Dewey, *The Early Works* I, p. 33) である。そしてこの「究極的な存在」とされた「思惟」が、また「自己意識」(self-consciousness) といわれ、この「自己意識」がそれ自体で「真の絶対者」(the true Absolute) である (Dewey, *ibid.*)、<sup>3)</sup>とされるとき、デューイのヘーゲル的な絶対的観念論の立場は明らかである。

八二年の夏までには、デューイは W・T・ハリス William Torrey Harris, 1835―1909、のためにヘーゲルに関する資料を進んで翻訳していたし、大学院での師、G・S・モリス George Sylvester Morris は「普遍的意識」(universal consciousness) の概念を中心にすすめるヘーゲル的な有機体説を主張していたことなどから、デューイがこの論文においてヘーゲル主義を自らの立場とするという事態が生じたのだといえる。こうして八四年、八六年の「心理学」に関連する諸論文において、デューイのヘーゲル主義は、ほぼその全容を

あらわにするにいたるのである。

まず学位論文『カントの心理学』(“The Psychology of Kant”)があるが、これは現在のところ読むことができない。しかし八四年四月の『思弁哲学雑誌』<sup>XV</sup>における『カントと哲学の方法』(“Kant and Philosophic Method”)により、また同年一月一七日付ハリス宛書翰により、必要なことは知りうる。

この書翰のなかでデューイは次のようにのべている。『カントの心理学』という標題は、カントの「精神の哲学」(彼のなかに見受けられる範囲内の)、あるいは知識論の、主観的側面」を扱うことを意味しており(これはヘーゲルの体系によく似ていけば、「エンチクロペディ」第三篇「精神の哲学」第一部「主観的精神」C「心理学」精神の意味で「心理学」というのだとのべているのである。引用者補説)、その内容は特に「人間経験の全領域の中心であり、また有機的統一でもある理性ないし精神の概念を彼がもっていたことを指摘できればよい」と考え、さらにこの「理性ないし精神の概念」に思案であるかぎり、カントは現代哲学の方法をうちたことになり、この概念にもとるかぎり、矛盾におちいつていることになることを明らかにしよう<sup>1</sup>と企てられたのだ、と。要約すれば、ヘーゲル的な立場からカントの知識論を吟味しようというわけである。

『カントと哲学の方法』もヘーゲル主義の立場からカント哲学を吟味し、さらに現代哲学の方法を論じようとする。『自己意識』、カントのいう「統覚」これこそ「実在的主観(主体) (the real subject)」であり、いわゆる主観と客観とは、「実在的主観(主体)」の自己表現の形式にほかならず、「理性 Reason が自己を自己から切りはなし、そのことによって自己との高次の統一に達するということ」を表現する最初の形式が主観と客観との関係にほかならないのである」(Dewey, *The Early Works*, p. 41)。また「一つの全体としての経験に妥当な唯一の概念は有機体の概念である。有機体の概念にふくまれるものは何か。厳密には、われわれがすでに達したところの分析的にしてかつ総合的な理性の概念、より充実した豊かさのなかで自己を統合する理性の概念、自己になるために自己を否定する理性の概念、これである」(Ibid., p. 42)とみることも、有機体の概念がヘーゲルの哲学において具体化されているとして、ヘーゲルの「論理学」、「否定的なるもの」および「弁証法」について概観を与える。

しかし「心理学」の構想は「心理学の立場」(“The Psychological Standpoint,” *Mind*, Jan. 88) あるいは『哲学の方法としての心理学』(“Psychology as Philosophic Method,” *Mind*, Apr. 86) における論議に照らして、哲学の要請を背景にしている。

られ、さらに展開されているので、ここでは後者を検討する。

デューイは、グリーン、ケアード達の心理学観を批評することを通して、自己の心理学観を語る。グリーン達は人間本性の二側面を仮定し、一面で人間は諸々の対象と同様に経験の対象であり、現象であるが、他面において自己意識であり、一切の対象の生ける統合に於いて無限であるとし、心理学が前者を、哲学が後者を取扱うという。これは人間本性のデュアリズムの主張であり、いかなる意味でもデュアリズムが人間本性にあると主張することはできない、とデューイはこれを否定する。なぜならば本来いかなる存在も一意識の経験において還元化された一 (Dewey, *The Early Works* 1, p. 149) とはじめて、哲学的思惟の対象たりうるものであり、自己意識とは断体化された万有にほかならず、「人間がもしも自己意識をもたないならば、そのときいかなる哲学も決して可能ではない。もしも万有が断体化されていたのなら、この現実化は心理的経験においてであり、また心理的経験を遂行してである。心理学はこの現実化の、この還元化された万有の、この自己意識の学的な説明である」 (Ibid.) からである。

人間性の二重性の否定がこのようにヘーゲル主義を根拠に述べられていることに注目しなければならない。一つの全体としての経験をとらえようとするデューイの考えは、実はヘーゲルが「精神現象学」を「意識の経験の学」として構想した、その延長上にあつたのである。ヘーゲルのな総体としての経験の把握という構想を自らのものとしたとき、デューイは「絶対的な自己意識が存在する」<sup>1)</sup> ことを哲学である。この絶対的な自己意識は自らを個々人の意識活動と行動のなかに明らかにする。この現われの学、すなわち現象学 (phenomenology が心理学である」 (Ibid. p. 156) と書きえたのである。ただここにヘーゲル主義と「新心理学」——実験的、生理学的な新しい心理学をデューイはこうよんだ。——との単純な結合があつたことも認めなければならない。「事物の真の存在 the real esse はそれらの知覚されたもの、percepti であり、また理解されたもの、intelligi のみでもない。それは事物の経験されたもの、experiri である。心理学はわれわれに理解されたものの学を、哲学は知覚されたものの学を与えうる。しかし心理学のみがわれわれに経験されたものの体系的に結合された説明を与えうるし、心理学はまたその全体性においてまさに経験するもの、the experior——すなわち自己意識そのものである」 (Ibid. pp. 151-2) という主張にも、この結合のありようは明白である。このような「心理学」から「自然の哲学」と「論理学」がうみだされるだろうと (Ibid. p. 155)、デューイはヘーゲルの「精神の哲学」、「自然の哲学」、「論理学」の体系そのままの図式を考へ、三つの学の関連に二種の翻訳を加える。そしてこの地点からヘーゲルの論理学主義をデューイは批判する。しかもこれらの結合、翻訳

はデューイの意図したことなのである。八六年十二月にハリスに宛ててこう書いている。「わたしがドイツの哲学者を研究しはじめたとき、あなたがかれらについて書かれたものを読みました。……あなたは『カントからヘーゲルへの偉大な心理学的運動』について語っておられます。……わたしがしようとしていることの一つは、その運動の少くとも一部分を今日のわれわれの心理学用語に翻訳してみたいということです。」<sup>(6)</sup>アメリカにおけるドイツ観念論摂取の中心をなしたセント・ルイス運動——この運動の機関紙が『恩弁哲学雑誌』であった。——をG・S・ホール Granville Stanley Hall. によって教えられた実験的心理学の方向に展開させようとデューイはしたのである。デューイにおいてヘーゲルの「絶対的なもの」、主体としての絶対精神は経験の「絶対的な総体性」(Ibid., p. 16)「心理学が経験をその絶対的な総体性において取扱う。」<sup>(7)</sup>「自己展開的活動そのものの全体」(Ibid., p. 160)に転ぜられ、哲学は彼のいう新しい「心理学」(Ibid., p. 157)に転ぜられる。<sup>(7)</sup>この「心理学」は、次の時期の論理学的な研究において、論理学が科学的認識の吟味と解されるのに対応して、この吟味を心理学的観点から行うという形で具体化される。われわれは、デューイがヘーゲル哲学を心理学用語に翻訳するという試みを通して、『心理学』(Psychology, 1885)において内観的方法と実験的、発生的、客観的な方法とを含む心理学の方法といわれる、この方法と結合しうるかぎりでのヘーゲル哲学を自らの立場としようとしたのであり、そしてそこに着目された、ヘーゲル哲学の体系における「精神の哲学」あるいは「主観的精神」中の「心理学」と同一視される「心理学」、ないし心理主義的に解釈されたヘーゲル主義に、新しい、後に実験的といわれる経験主義の原初の姿があるといえる。先にふれた「心理学」においてローゼンクランツの『心理学あるいは主観的精神の学』(J. K. F. Rosenkranz, Psychologie, oder die Wissenschaft vom subjectiven Geist, 1837)が他の多くの心理学書とともに参考文献としてあげられていることも、右の点に関して暗示的である。

## 二、「新物理学」とヘーゲル主義

デューイの、論理学への言及は『新心理学』("The New Psychology," the Andover Review, Sept. 1884)においてみられる。ここでは実験的、生理学的な新しい心理学は生を包括的にとらえようとしており、これに対応して、個々の事実の実証的な解明と矛盾せず、この事実を事象の總体の現われと解しうる生の哲学ないし「経験の哲学」が求められる。「スコラ哲学の形式論理学」ではなく「経験の生きた事実」、「具体的な経験、生実および発展の論理学」が必要であり (Dewey, The Early Works 1, pp. 58-60)、「生

の論理学に仕がって、新心理学は生を包括的に理解しようとするのだ」(Ibid., p. 60)とべられる。

なお「有機体」と「環境」との観念が重覆されるのだが、ヘーゲルの『精神現象学』においても「個性」ないし「個人」と「環境」との関係がのべられている。デューイのいうところはおよそ次のようである。「新心理学」は生物科学の影響のもとで「有機体」の観念をみいだすのだが、この概念は当然「環境」の概念と相合している。そこで「精神生活を、真空の中で展開する個人的な、他と切りはなされたこととして、考察することは不可能になる。……個人がそこで生まれ、そこから白らの心的かつ精神的な栄養をひきだし、そのなかで自分の固有の働きをなさねばならず、あるいは心にかつ道徳的な難儀をなさねばならない、かの有機的な社会生活と個人との有機的な考え方が新心理学を発展させるのに与っていた……」(Ibid., p. 66)。ヘーゲルは「個性の法則」(Phänomenologie, hrsg. von G.Lasson, Zweite Auflage, S. 201)の内容をなぞ(笑)「個性そのもの」(die Individualität selbst)と「環境」(die Umstände, der Kreis)とをあげ、両者の関係を論ずる(a. a. O. S. 201-3)。「個性が何によって、どのような影響を受けるかは「個性そのものにのみかかっている」。すなわち個性が影響をうけて、かくかくの個性になったということは、既に個性がこのような影響を受けるようなものであったのであり、環境、気象などの環境は「存在するものとして示されるのだが、他方ではこの個性のなかに示される、というる。だがまた、個人のなかに環境の状態が完全に現われているが、これは世間の状態そのものが自らを刻々に現わしているのであって、特定の姿で個人に働きかけたのである、といいうる。このように「われわれは、一方が他方の照りかえし der Widerscheinであるところの画像がならべられている」(手の画像をもつといえよう)(a. a. O. S. 202)。ヘーゲルにくらべ、デューイののべる所が常識的であり、平坂であることはいなめない。両者の対応は多く、単なる概念の類似にとどまる。したがって、デューイの語るように、生物学の影響をうけて「有機体」と「環境」の概念を重ねたのだ、というべきであろう。

ついで「ライフニッツの人間悟性新論、批判的解説」(Leibniz's New Essays Concerning the Human Understanding, A. Critical Exposition, 1888) p. 45「有機体は物質と調和する論理学はヘーゲルの思想である」と「ライフニッツ哲学をヘーゲルと同様の「客観的観念論」である」という(Dewey, The Early Works I, p. 43)「デューイはライフニッツの自然観をヘーゲル・モリスの有機体説と基本的に合致するものと解する」とともに、「実体は活動性である」「万物は相關関係的統一である」という思想、また「有機体」、「連続性」等の観念は不滅であって、カントとその継承者ヘーゲルの仕事は「ライフニッツの客観的観念論を正統化するべき

方法の発見である」(ibid. 傍点は引用者)と評するのである。すなわち哲学の内容の点では、差別をふくむ統一性が有機体および調和の概念によって与えられたが、方法として、スコラ哲学者の形式論理学を「差別を排除し、確的でこぼれた、生命のない統一性しか与えない方法を」とり、ここに矛盾をのこした、というのである。論理学はここで方法と解されているのだが、次の段階では、さらに科学方法論と与えられるにいたる。それは九〇年から九一年にかけて発表された以下の三論文、すなわち「論理学は二元論的な学であるか。」("Is Logic a Dualistic Science," Open Court, Jan. 1880)『検証の論理学』("The Logic of Verification," Open Court, Apr. '90)および「論理学理論の現状」("The Present Position of Logical Theory," the Monist, Oct. '91)にてである。

『二元論的な学であるか』において「古いスコラ哲学の論理学」(the old scholastic Logic)に対して「新論理学」(the New Logic)がおかれる。後者は「科学によって用いられる思考活動の方法を説明しようとする企、……科学の、すなわち現実的知識の論理学 the Logic of science i. e. of actual knowledgeである」(Open Court, Jan. 1880, p. 2040)と規定される。「新論理学」は「科学の論理学」すなわち科学方法論、「探究の理論」たろうとするものである。デューイはこの「新論理学」の構築に貢献するものとしてヴェンの「経験のないし帰納的論理学の諸原理」(John Venn, Principles of Empirical or Inductive Logic, 1889)をあげ、著者が論理学にとって内なる心と外なる現象の世界との二元論は客観の前提である、とする点を批判しようとする。

ヴェンは、一方にわれわれの外の現象の世界が、他方にわれわれの中、観察し、思考する精神があり、論理学は前者に関する後者の判断にかかわる、というのである。デューイは、論理学が現象に関する判断における思考の過程にかかわるのだ、という点には同意する。しかしヴェンが「心的過程」と「客観的現象」とは「論理学にとって少くとも全く独立した別々な所与<sup>データ</sup>なのであって、論理学的過程が第三のもののようにあらわれ、一方を他方に関係づける」(Ibid., p. 2041)とする、この二元論的前提には反対しなければならない、とデューイは考える。なおヴェン自身「われわれは長い年月の間哲学若達を困惑させてきた問い、すなわちいかなる意味においてわれわれの概念は現象的、外的な諸対象の『類似物』あるいは『模写』であるのかという問いには、決してかわりをもちたない。われわれの比較するのは、第一に印象であり、第二に表象と概念作用<sup>イデオロギイ</sup>とにつきる」とし(Venn, ibid., p. 28, Dewey, ibid., p. 2041)、「論理学的過程の相いは、内なる思考と外的感覚・観察との間の完全、正確な対応を獲得するところにあるという。」「そこで問題は知覚と観察とが思考活動、概念と

いかにして論理的に関係づけられるか。論理学はその仕事を、知覚と概念が既製のものとして与えられ、二元論的な基礎が与えられるようになるときに、始めるのか、それとも論理学的過程は知覚と概念の両者に等しく入っていて、各々が、一定の立場からみて、論理的性格をもつようになるのか、ということになる。(Dewey, *ibid.*)。

いうまでもなくデューイは後者の考えをとる。いいかえれば、統合と分析という論理学的過程を通してのみ、対象はわれわれにとっての対象となるのであって、そのような対象のわれわれの最初の知覚は、試験的な仮説としてわれわれの経験を展開するために作られたのである (Ibid., p. 2042)。火が燃えているという日常的な知覚ないし知覚を、分析と統合との論理学的過程をもつ、思考過程を経た試験的な仮説であり、燃焼の化学理論も、さらに展開され、修正されねばならない仮説なのである。その間にあるのは「論理的機能の展開の程度の違い」 (Ibid., p. 2043) のみである。こうして「ただ一つの世界、知識の世界しか存在しない。内と外、すなわち経験の世界と概念の世界という二つの世界があるのではない。そしてこの一つの世界はいつでも論理的なものである」 (Ibid.) と結論づけられる。

「経験現象学」においても、経験的な仮説と概念的な仮説は、その現われが違うので、経験的仮説とせられるという進言がのべられている (Hegel, a. a. O., S.166)。また既知のところにデューイは「論理学・探究の理論」 (Logic: The Theory of Inquiry, 1938) の第四章から第六章にかけて「論理的な探究と探究の終止について論じ、両者は現われ、ないが論理に起因し、一つは、そのハイムンにおいては共通の構造をもつものである」 (これは、ハイムンが「理論的探究が、形而上学的探究に代って自然な探究の場をうけたから、デューイ哲学を成している」ということである)。

なお意識と対象、内と外という二つの世界がないのであるならば、科学においていわれる「検証」は、どういう意味と解されねばならないのか。この問いに答えようとするのが「検証の論理学」なのである。ここでは、通常、意識と対象としてが置かれる二つを「概念」と「事実」と規定し、その双方が探究の過程における論理的な意味の違いであることを確かめに論ずる。

未開人やちん坊の無知な知覚が「概念」として扱われなければならないのと同様な、我々の論理的知覚が「事実」とされる。しかし「概念」はそれ、「事実」が実現されないというシニカルな心と、「概念」が概念に対する調整 adjustment の必要に迫られる。「心は調整済 actuality の由に投影すべくつとめている概念と現象的観念 the actual idea とが矛盾する」。「現象的観念がその投影を妨げるものである」 (Open Court, Apr. '90, p. 2272)。となれば「概念」はつとめているわけになるが「概念」は「概念」であり「概念」は「概念」である……

観念とは困難が感じられる事実であり、心の動きに対して障壁を対置させる事実である」(Ibid.)。われわれは、先に示したヘーゲルのいわゆる「一方が他方の照りかえしであるところの画像がならべられている二重の画廊」を観念と事実に関してもつのだといえよう。

そしてさらに次のように述べられるとき、あらためて、ヘーゲル哲学を貫く論理と、デューイの「探究の理論」との深い関連に気づくのである。「どの科学においても、また科学のどんな主題に関しても、観念と事実とが一つになる時期がある(確定的な、安定し、調和した状況)。しかし矛盾が生ずる。そこで心は観念を試験的なものとみなして離しておく(不確定な、混乱した、問題的な状況)。この段階になると、心が、明確に規定された観念——別な面からみれば実在的な事実——を獲得しようと企てる時期が続く(探究の全過程)。心はそれゆえ観察・実験あるいは他のあらゆる手段によって自由に、観念をできるだけ明確な首尾一貫したものにし、仮説あるいは理論を形づくる(問題の設定、問題解決の仕方の決定)。心はみせかけの事実を組織づけ、それに新しい意義をつけ加えるために、その理論を事実と近づける(実験的操作、検証)。これが果たされるやいなや、観念と事実は一つになり、またさらに矛盾がみいだされ、過程がおし進められねばならないようになるまで、一つになっている(保証された言明、新しい統合された状況の産出)」(Ibid, p. 2228, なお( )の中は引用者が「論理学・探究の理論」の言語で補足して見たものである。)(8) この結論は後のデューイによってうけいれられるものである、とホワイトがいうのも当然である。

こうして九〇年の二論文において思考活動、すなわち探究の過程の分析という、デューイ哲学の基本的問題が設定され、この問題にとりくむ基本的視点もともに与えられたといつてよい。それはヘーゲル主義的な、新しい経験の哲学という姿をとってなされたのである。九一年の『論理学理論の現状』において「科学の方法の理論」を求めて、カントからヘーゲルにいたり、彼を「科学的精神の真髄」(Dewey, *Monist*, Vol. I, 1891, p. 12)とたたえながら、「科学の方法の理論としての論理学」(Ibid, p. 2)が明確な形で示されれば、科学と科学者が人生の諸問題にたちむかうべく、白覚と自信をもつであろうとのべる(Ibid, pp. 1—2)とき、一層はっきりと後のデューイを暗示することになる。

注(8) L. S. Feuer, "H. A. P. Torrey and John Dewey: Teacher and Pupil," *American Quarterly*, Spr. 1958, Vol. X, 26—35。

(9) L. E. Hahn, *Introduction in The Early Works of John Dewey*, 1: 1882—1888, p. xxiv. 例として若干引用し



てみる。「知るということは知るところの何かを要求する、物質的現象を知るためには、心理的現象が要求される。事物は、心が心によって観念ないし心の現象になるまでは存在しない non-existent のである」(『The Early Works of John Dewey, I, p. 5』)。「心が物質的現象であるということを証明するためには、存在論的な知識——すなわち実在的存在についての実在的知識——の可能性を前提することが必要である。しかしその実在的知識のなかに必然的に知るところの主体が含まれる。心が一つの現象であることを証明するためには、暗黙のうちにそれが実体であることを前提せざるをえない」(Ibid, p. 6)。「実在的原因性についてのわれわれの知識を説明するためには、実在的原因性を前提することである。なぜならばこの一般化された概念は、経験の結果であって、それ自体経験において与えられた現象の結果であるからである」(Ibid, p. 7)。「精神 mind は真の原因であり、真の原因性の知識を与える。そこで精神と結果とを証明するために、唯物論は原因としての Ego を要請しなければならぬであろう」(Ibid, p. 8)。「精神が物質的結果であることを証明するために、唯物論は精神の直覚的な力か、さもなければ精神がそれ自体原因であるということかを前提せざるをえない……」(Ibid)。

- (3) L.E.Hahn, ibid をみよ。モリスについては下記に引いた M. White, The Origin of Dewey's Instrumentalism, 74 pp. 30-31. またデューイのヘーゲル主義の由来については、ハリスの編集による『思弁哲学雑誌』が、たとえば二号で「精神現象学」、四号で「予備学」、十六号で「法の哲学」のように、ヘーゲルの抄訳、紹介を多数掲載してきたのを、恐らくデューイは読んだであろう、という点を指摘しよう。なお主体的な要因については、他ですでにのべた。(拙稿「デューイ哲学の形成」その一)「弘前大学文経論叢刊」所収)

- (4) この書翰については N. G. MacLuskey, Public Schools and Moral Education, 58, p.181 foot note, G. Dykhui zen, "John Dewey at Johns Hopkins," Journal of the History of Ideas, XX (1961) No. 1, p. 112. あるいは大浦猛著『実験主義教育思想の成立過程』、三〇四・五頁による。

- (5) デューイは、哲学の真理の形式と内容、方法と内容との間にはいかなる差違があってもならない、と考える。この基本的要求がみたされたいというのが、彼のヘーゲル論理学主義の批判の要点である。すなわち、哲学の内容の点からいえば、ヘーゲルの哲学は、自己意識あるいは精神の全内容を内容とする。しかし、その方法としての論理学は、思考の条件にすぎない抽象された非存在のみにあてはまる。この矛盾がヘーゲルに現にある、とデューイはいう。いうまでもなく、ヘーゲルの論理学を伝統的な論理学と同視し、右のように規定することは、ヘーゲルの誤解によるといわねばならない。

- (6) この書翰については L. S. Feuer, "John Dewey and the Back to People Movement in American Thought," Journal of the History of Ideas, XX (1959) No. 4. および鶴見和子訳回論文「『思想』四四〇号所収」による。

(7) デューイはこうのべる。心理学は一方で実証的な科学であり、観察、実験、検証を通じて、事実の体系的な理解と説明を目標とする (Dewey, *ibid.*, pp. 158—9)。しかし他方で「各科学は意識の経験のある一面をとらえつかう、そして正にその理由で各科学はその局面に存在を与える総体すなわち意識を論ずることができなかった。しかし心理学において、われわれはこの意識の現われと説明をもつ。心理学は意識の全体性において、特殊科学が部分において与えようとしたものの、すなわち経験の本性を与える。したがって心理学は、全体が部分に対するように、特殊科学に関係する」 (Ibid., p. 159) とされる。

(8) M. White, *ibid.*, pp. 81—2. ホワイトはおよそ次のように記す。デューイは観念と事実との間に橋わたしをしようとする。そしてたと言葉はわかりにくく、観念論を前提にして推論がなされようとも、その結論は、今日、デューイによってうけいれられるであろう。九〇年代初めの他のデューイの論説の大部分と同様に、大変不明瞭なところがあるが、予言的性格をもっている、と。

◎なお本稿は、私の個人的事情から、日本デューイ学会「紀要」第十一号に掲載予定のものをそのままて、責をふさいだ。